
もう二度と…

萌歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう二度と…

【Nコード】

N9553Y

【作者名】

萌歌

【あらすじ】

外は雨。万事屋も、いつになく静まり返っている……

言葉の禁……《笑顔》（前書き）

短篇としてUpしていたものを連載としてUpし直しました！

内容は変わってません！！

言葉の禁……《笑顔》

外は雨。もう何日もこんな日が続いている。太陽がないと自然と気分も晴れない。

当然万事屋もいつもの騒がしさから比べれば、だいぶ静かだった。

しかし、今日の静けさの原因は雨だけではない……と新八、神楽は思っている。

おかしいのだ、あの人の様子が。

いつもはジャンプだ甘味だと言って、ソファ―にウダウダ寝っころがっている銀色だが、今日は社長イスに座り、ぼおっと空を眺めていた。心なしか、銀色の周りの空気もピリピリしている。

「銀さん、調子悪いんですが？」

念のため新八が問い掛ける。十中八九違うだろうが。

「ん？ ああーそんなことねーよ。

たまには銀さんだってぼおつとしたいんですー。」

「銀ちゃんがぼおつとしてるとか何アルか？ 明日は槍が降るアルか？」

「ちょっと神楽ちゃん？ 何物騒なこと言ってるの？ 女の子がそんなこと言っちゃいけません。ってか俺がぼおつとしてるだけでそれとか酷くない？」

「だって事実ネ。」

（銀時Side）

……バレてたか。

出来るだけイライラを出さないようにしていたつもりだったが、地味に長い付き合いのこいつらには効かなかったらしい。

どうにも嫌な予感がする。昔から嫌な予感だけは当たってしまう。それに、最近自分の周りをうろついてる奴らもいる。

「……もうダメか。」

銀時はそう呟くと和室に入ってしまった。

（銀時Side end）

銀時が和室に入って数分。玄関のチャイムがなった。依頼人かと思ったが、今日は銀時が用事があるらしいので、内容によっては断ろうと考えつつ、新八は玄関に向かった。

「はい、今出ます。」

ガラッ

何度も壊され、だいぶ建て付けの悪い扉を開けた先にいたのは、真選組のいつもの3人組、近藤、沖田、土方だった。

「やあ、新八君。」

最初に言葉を発したのは近藤。間髪入れず沖田が「旦那居やすかい？」と続けた。

「銀さん、ですか？」

「ああ。」

「依頼ですか？…まあとりあえず上がってください。」

「邪魔するぜ。」

3人を応接間に連れていくと、音が聞こえたのか、銀時が和室から

顔を出していた。

「税金ドロボーさん達が揃いも揃って何の用？言っとくけど、今日は銀さん忙しいんですー。」

「万事屋、お前に聞きたいことがある。」

「…何？」

そういつて怪訝な顔をして出てきた銀時はいつもの和洋折衷の服ではなく、白地に薄紅の桜があしらわれた、一目見ただけで上物と分かる着物に、濃紺の羽織という格好をしていた。銀時の銀髪によく映えている。

それを見た土方は苦虫を噛み潰したような顔を一瞬して、万事屋、と口を開いた。

「……お前が、白夜叉だな？」

沈黙。

恐ろしい程に空気がピンと張り詰めた空間が広がった。銀時は俯いており、表情を伺うことは出来ない。

「……やっと気づいた？」

数秒後、顔を上げてあっけからんとそう言い放った銀時。その顔は妙にサッパリとしていた。

「旦那……」

沖田の端正な顔が辛そうに歪む。

「で？どうすんの？俺を捕まえる？」

「ああ。坂田銀時、天人大量虐殺罪でお前を逮捕する！」

「……………フッフッ」

軽く笑った銀時の目は、全く笑っていない。背後には殺気も漂っている。

「何笑ってやがる！」

うつすらと冷や汗をかきながら、土方も負けじと睨み返す。

「いや、あのヅラさえ捕まえないお前らが天下の白夜叉様を捕まえられるのかなー？って。」

刹那、銀色の風が吹き、真選組の3人は床に伏せられていた。

「無理じゃん」

嘲笑した銀時自身は既に入口のところまで移動している。その手にはいつの間にか深紅の鞘に収められた真剣が握られていた。

「……ッ白夜叉アア！」

「……ッ銀ちゃんは白夜叉なんかじゃないアル！銀ちゃんは銀ちゃんネ！」

「そうだ！銀さんをその名前で呼ぶな！」

やっこのことで声を絞り出した2人。あまりの展開に呆然としていたが、土方が吐いた言葉にようやく我に返った。

「……出てこいよ、いるんだろ？」

2人の言葉に少し頬を緩めると、どこかに向かい声を上げた銀時。そうすると、音も無くドアが開き、あまりにも有名すぎる3人が顔を出した。

「……ッ桂……高杉……！！」

「……ッ！！お前は快援隊の……！！」

喉から手が出るほど捕まえたい相手が目の前にいる。なのに銀時の峰打ちのせいで動けない。そのことは土方や沖田、近藤を酷く苛立たせた。

「いつから気づいておったのだ、銀時。」

「ズラが分かりやすすぎるんだよ。」

「ズラじゃない桂だ。それに高杉、何故お前が答える、俺は銀時に聞いておるのだ。」

「うるせエ、ズラ。」

「ズラじゃない桂だ。」

「まあまあ落ち着くぜよ。わしらは銀時に会いに来たんじゃ。」

「……悪かった。」

ハッハッハと黒い笑顔で辰馬が笑うと桂がバツが悪そうに謝る。
…しかし、高杉は華麗にスルーし、銀時に向き直った。

「銀時ィ、大切な兄弟より幕府の狗の方が優先ってかァ？」

「ゴメンね、晋助。捕まってた。早く行きたかったのに。」

「ッッお前用事って……!!」

「そうだよー。この3人と会う約束してたの。」

「信じてたのに……ッ」

「やっぱり鬼はいつまで経っても鬼ってことかよッ！」

浴びせられる罵声。

「見損ないやした。」

侮蔑の眼差し。

その光景は銀時の中である出来事をフラッシュバックさせてゆく。

「……………に」

「……………銀時？」

桂が呼びかけても、何の返事もない。そのかわりに聞こえてきたのは最悪の単語。

一一一 鬼

「……………そうだよ、おれは鬼。…鬼はしあわせになんかなったやいないんだ。」

「……………ぎ、ん…ちゃん？」

「ツツ銀時!!」

「何言ってんだテメエ!!」

「銀時!!」

桂、高杉、辰馬が駆け寄る。のろのろと顔を上げた銀時の目は輝きを失い、何も映していない。

「銀時!! お前は鬼などではない!」

「テメエは俺達の大切な弟だ!!」

「わしらを見てくれとおせ銀時!!」

焦点の定まらない虚ろな目がゆっくりと3人を映す。

「……しんにい、こたにい、たつにい?」

「ああ、そうだ。」

「帰ろう、銀時。」

「松陽先生の元に戻ろうぜい。」

「もうござんところにいる必要はなか。」

「……うん、帰る。せんせいのかえりよ。」

「……おまんら、」

坂本が口を開く。真選組の3人は銀時の変わりように驚きを隠せな
いでいた。

「銀時に鬼という単語は禁句じゃ。なのにおまんらは…ッ!!」

その言葉に付け足すように、高杉が憎々しげに切り出す。

「どうして俺やヅラがテメェらに手を出さなかったか教えてやろうか。」

「……銀時が、真選組の奴らは良い友人だ、と言っていたからだ。貴様らが銀時に気に入られていたから、俺達はお前らに手を出さなかった。」

「…………ッ!!」

「なのに、テメェらはいとも簡単にそれを裏切ったんだぜイ？」

銀時がそんなことを思っていたと知った3人。今さらながらしでかしてしまったことの重大さを痛感した。

「だが、もう容赦はせん。」

「真選組や幕府はもうすぐ俺達直々に潰してやらア」

大物攘夷志士2人は吐き捨てるようにそう言って、先に行った坂本と銀時を追うように出て行った。

しばらく声も出せなかった5人。

正常に働かない脳で分かることは、

あの銀色の笑顔はもう二度と見ることが出来ないということだけ……

言葉の禁……《笑顔》（後書き）

スローペースとなってしまいましたが、頑張って連載していきます
^

つかの間の……《夢想》(前書き)

やっと更新したくせに短いです…;

もはや閑話の勢いww

つかの間の……《夢想》

あの後、とりあえずは1番近い桂の隠れ家に行こうという話になり、向かった4人。

屋敷に着くと、桂の部下達と高杉の間で一悶着起こったが、坂本が黒い笑顔で一蹴し、その場は収まった。

そして桂の私室に入り、現在^{いま}に至る。

「ヅラァ、お前けっこう広い屋敷使ってるじゃねエか。しかもこんな江戸の真ん中で、よく幕府の狗に嗅ぎ付けられなかったなァ？」

高杉が、先程文句を言われたお返しなのか何なのか、桂を挑発した。

「フン。高杉、貴様は”灯台下暗し”という言葉を知らんのか。それに人数が多いからな、このぐらゐの広さがないとダメなのだ。」

それに負けじと桂も挑発。幼稚な争いであることは否めない。

「…………、そんぐれエ知ってらア。」

間が空いてからのこの言葉。
今回は高杉の負けらしい。

「これから銀時はどうするがだ？ 萩に戻るかえ？」

不毛な争いをしている2人は放って置いて、坂本が窓際で空を眺め

ている銀色に問いかける。

「銀時、俺たちへの迷惑などは一切考えるな。」

桂も銀時の方に向き直り、釘を刺す。

「てめェがやりたいと思うことをやればいい。」

高杉もお気に入りの煙管に火を入れながら呟いた。

そう兄達に言われた銀時は、

「まだ……まだ、考える時間ちょうだい。」

と言う。さっきの事がまだ尾を引いている様子で、いつもの銀時のようなだるーとした喋り方ではない。

そんな弟を見た兄達はこっそりとアイコンタクトをとる。そして桂が立ち上がり、襖の向こうに消えた。

「小太郎は？ どうしたの？」

「^{すぐ}じきに帰ってくるき」

「そっか。」

安心した様子の銀時。先程高杉から貰った飴を口に入れ、寝っ転がった。

「どうだ？ その飴、京都の老舗のモンだぜい？」

「……!! 美味しー!!」

ようやく、笑った銀時。先の出来事から一ミリも笑っていなかったのだ。

「ありがと、しんすけ」

ふにやり。まさにこの形容詞がピッタリというような笑い方。

（（この顔が見たかったんだッッ!））

兄2人がこんなことを思っているとは露知らず、飴を口の中でカランコロンと転がし、味を堪能している。

一方、兄2人は心の中で全力でガッツポーズをしていた。坂本はと

もかく、あの高杉もだ。

なぜなら、この2人+桂&今は亡き恩師 吉田松陽の4人は、揃いも揃って銀時バカなのである。

ご察しの読者様もいらっしやるとは思うが、この4人の最大級の癒しは銀時のふにやりと笑う笑顔だからなのだ。

「持って来たぞ。」

スツと滑らせるように襖を開けて入ってきた桂の手には酒とお猪口。

「おお！美味そうじゃのう！」

「てめエが1番最初に反応してどうすんだよ。これは銀時のために用意した酒だろオが。」

「そうじゃった、そうじゃった。」

アハハーと辰馬が笑う。高杉も微かに口角を上げていて、銀時も相変わらずのふにゃふにゃ笑顔。

前にもこんなことあったな、と桂は思う。そう、あれはまだ戦争の時。つかの間の休息だった。

『晋助く、酒あるぜー』

『銀時、そんなもんどこにあつたんじゃ？』

『秘密く……って何でテメーがいるんだよツツ！！テメーじゃない
くて晋助に声かけたんだよ！』

『ビドいぜよー、わしも混ぜてほしいきに！』

『てめエがいると俺たちの飲む量が減るんだよ』

『ほがなことないぜよ』

『待て、俺も入れろ!』

あの時は、こんな未来が来るなんて思ってもみなかった。

国を変えられる、護れると思っていた。

そう思っていたかった。

……う……ろう！小太郎！」

「……！……何だ銀時か。驚かせるな、心臓に悪い。」

桂が思い出からかえってくると、目の前には自分の自室と3人の顔。
余程思い出に浸っていたらしい。心の中で桂は一人笑う。

「驚かせるなじゃねエよ。銀時が呼んでるってのに、反応しねーてめエが悪イんだろうが。」

「すまない、考え事をしていた。」

「考え事だア？ 考え事なんて酒持ったまんまするモンじゃねェよ。」

せめて俺たちに渡してからしろ。

そういつて高杉は半ば強引に酒を奪い取り栓を開けた。

「高杉だけ独り占めはするいぜよー」

「そーだそーだ！晋助、俺にも分けろっ！」

銀時はこれからどうするつもりなのか。

その瞳からは何も読み取ることができない。

きつとどんな道を選んでも困難が待ち受けているだろう

だが今は

今だけはこうして穏やかな時間を過ごさせてほしい。

「おい貴様ら！俺も居るということを忘れるな！」

第二話 e n d

つかの間の……《夢想》（後書き）

すみません、途中から自分でも何書いてんだかわかんなくなってきましたWW

途中からナチュラルに桂視点です。

わかりづらっ!!

もっと精進するので、もし宜しければ感想、アドバイスなどお願いします!!

特に言葉使い!!

ちなみにうちの高杉さん時々今回みたいになる可能性大です（^^）

ここまでお読みいただき、ありがとうございました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9553y/>

もう二度と…

2011年12月2日17時48分発行